

# 鄭思肖「墨蘭図」について

## はじめに

亡国の憂憤を託したとされる無根の蘭。当館所蔵の阿部コレクションの中で一際異彩を放つ鄭思肖「墨蘭図」【図1】は、龔開「駿骨図」と並んで人口に膾炙する宋遺民の絵画である。著者はここ数年、『関西九館所蔵 中国書画録Ⅲ』（以下「書画録Ⅲ」、本年三月刊行予定）に所収するため、当館の鄭思肖・龔開両作の題跋や印章等を起こし、註を附す作業をおこなってきた。この作業の中、改めて鄭思肖の基本文献に触れながら墨蘭図を見直す機会を得たが、紙幅の都合上「書画録Ⅲ」にはあまり触れられなかった点もある。よって本稿では、館蔵品紹介もかねてここに整理しておきたい。

## 1、大美本墨蘭図の伝来

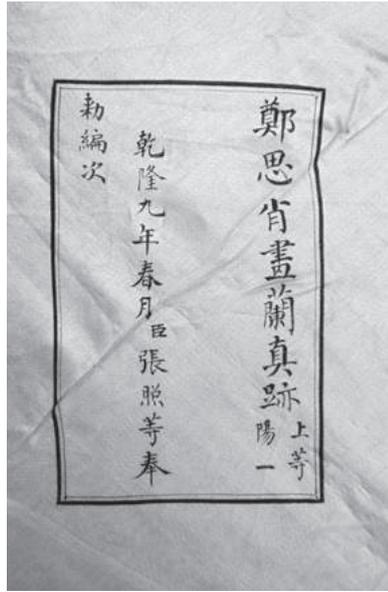
現在、大阪市立美術館に収蔵される鄭思肖の「墨蘭図」（以下、「大美本」）は、東洋紡績株式会社社長をつとめた阿部房次郎（一八六八～一九三七）の旧蔵品の一つとして昭和十七年（一九四二）に令息孝次郎氏より寄贈されたものである。清朝内府に伝来し、『石渠宝笈』



【図1】 鄭思肖「墨蘭図」 元・大徳10年（1306） 紙本墨画 一巻 25.7×42.4cm  
大阪市立美術館（阿部コレクション）

森橋  
なつみ

初編卷三十二に所載され、現在も「鄭思肖畫蘭真跡、上等陽一。乾隆九年春日、臣張照等奉勅編次」と墨書のある包袱【図2】と「乾隆御賞、鄭思肖畫蘭」と刻まれた別子（玉製のつめ、【図3】）が付属する。



【図2】 清朝内府製包袱  
(墨書部分)



【図3】 別子

本紙には鄭思肖の自題のほか陳深（一二五九頃～一三二九頃）の題詩があり、後に元の王育から明の祝允明（一四六〇～一五二六）まで十二名の跋がつづく。詳伝が不明である者も少なくないが、鄭思肖が制作して以来、明時代まではおおむね蘇州周辺のエリアに伝来し、鑑賞されていたようである。巻末の祝允明の跋には「此紙先藏於衲子、今歸吾子魚」とあり、僧侶の手にあったものが正徳六年（一五一一）、彼の甥である陳鼈（字は子魚<sup>3</sup>）の收藏になったという。跋のほか鑑蔵印をみると、本作はその後、古蹟名筆をあつめた『鬱岡齋墨妙』で知られる王肯堂（？～一六三八）から、明末清初の收藏家張孝思へと移り、最終的に宋犛（一六四三～一七二三）のもとから清内府に入ったようである。清の璽印は高宗（乾隆帝）、仁宗（嘉慶帝）、そして溥儀（宣統帝）の印が鈴される。

なお、本作には付属していないが、高宗・仁宗朝に仕えた翁方綱（一七三三～一八一八）の『復初齋集』に「鄭所南墨蘭図巻<sup>4</sup>」が載り、そこに記される鄭思肖の款記や引用された王冕・陳昱の題跋の内容は、大美本墨蘭図と一致している。翁方綱跋が大美本を指しているとするば、なぜ現状作品に付属していないのか、或いは別本を指しているのだとするば、なぜ款記や他の跋の内容まで同じなのか。この点については別稿を期したい。

清末になると大美本は内府を離れ、溥儀の教育係であった陳宝琛（一八四八～一九三五）の外甥である劉驥業の手によって大阪・博文堂の原田悟朗のもとへ持ち込まれ<sup>5</sup>、最終的に阿部房次郎のもとへと収まった。高野絵莉香氏によれば<sup>6</sup>、溥儀が弟の溥傑に褒賞として下賜した書画の目録『賞溥傑単<sup>8</sup>』に「鄭思肖墨蘭図」の記載があり、宣統十四年（民国十一年、一九二二）の十一月初五日項にあげ

られているという。また楊仁愷氏によれば、<sup>(9)</sup> 実際には以後も溥儀の手元にあつて、天津在住時に売りに出されたようである。溥儀が紫禁城を出て天津の張園に仮寓していたのは一九二四年の十一月〜一九三〇年のことであり、この頃、天津に駐在していた劉驥業が交渉役として溥儀の傍に仕えた。<sup>(10)</sup> 紫禁城とはかけ離れた張園での暮らしは、生活に困ることが多く、宮中から持ち出した財物を売ることもあつたようである。<sup>(11)</sup>

溥儀の天津在住期に、側近の劉驥業によつて日本にもたらされた大美本墨蘭図。博文堂に持ち込まれ、阿部の手へと渡つた時期を特定できるような箱書き等は付属していない。ただし、阿部が生前刊行した『爽籟館欣賞』第一輯（博文堂、昭和五年（一九三〇））には載らず、没後の発刊となつた第二輯（博文堂、昭和十四年（一九三九））に所収されている。<sup>(12)</sup> このことから、阿部の手元に入つたのは昭和五年以降のことかと思われる。

## 2、鄭思肖と墨蘭

鄭思肖の墨蘭図は、大美本のほかに呉湖帆（一八九四〜一九六八）旧蔵のエール大学ギャラリー本<sup>(13)</sup>など、ごく僅かに伝存している。しかしながらいづれも鄭思肖の真筆とするには基準となる遺例がなく、判断を留保せざるを得ない。ここでは鄭思肖の墨蘭図をめぐる言説を追いながら、その特色をみてみたい。

まず鄭思肖の詩集より「墨蘭」をひく。

鍾得至清氣、精神欲照人。

（鍾め得ん至清の氣 精神人を照らさんと欲す）

抱香懷古意、戀國憶前身。

（香を抱き古意を懐い 國を恋い前身を憶う）

空色微開曉、晴光淡弄春。

（空色微かに曉を開き 晴光淡く春を弄す）

淒涼如怨望、今日有遺民。

（淒涼怨望するが如し 今日遺民有り）

この詩はいわゆる『心史』中の『大義集』（一二七九年成書）にある詩で、鄭思肖が墨蘭に亡國の念や遺民感情を託していたことがよくわかる。大美本の自題詩は「向來俯首問義皇、汝是何人到此鄉、未有畫前開鼻孔、滿天浮動古馨香」とあり、明確な表現ではないが、蘭の古香を詠い、前朝への追慕がうかがえる。また、大美本の自題詩につづく題跋では、墨蘭や鄭思肖の姿を、「離騷」をはじめとした楚の屈原のイメージに明らかに重ねている。<sup>(14)</sup> 元の倪瓚（一三〇一〜一三七四）が別本に寄せた「題鄭所南蘭」にも「秋風蘭蕙化為芽、南國淒涼氣已消。祇有所南心不改、淚泉和墨寫離騷」（『清閨閣集』卷八）とあり、元時代における鄭思肖の墨蘭図に通底するものであつた。これは後人の想像力に拠るばかりではなく、鄭思肖自身がすでに強く意識しており、同時代を生きた張炎（一二四八〜一三二〇頃）によれば、鄭思肖は蘭を画く傍ら、屈原の肖像をつくることもあつたという。<sup>(15)</sup>

では、宋遺民としての鄭思肖の自己表現に、遠く楚の屈原のイメージを重ねられた墨蘭図とはどのように画かれたのか。先の張炎の別の詩には、「蘭曰國香、爲哲人出、以色香自眩、乃得天之清者也。楚子不作、蘭今安在。得見所南翁紙上數筆、斯可矣」とあり、また

鄭元祐（一二九二～一三六四）による小伝に「平時喜畫蘭、疏花簡葉、不求甚工」（『遂昌山人雜錄』卷一）とあり、鄭思肖の蘭図が簡潔なものであったことを証言している。

また、鄭思肖の画く蘭がいわゆる「無根蘭」であったことは、盧熊（一三三一～一三八〇）「鄭所南小傳」にみえ、「精墨蘭、自更祚後、爲蘭不畫土根、無所憑藉。或問其故、則云、地爲番人奪去、汝猶不知邪。不欲與、雖迫以權勢、不可得也」（盧熊撰『洪武蘇州府志』所収）とある<sup>17</sup>。すなわち、墨蘭にたくみであった鄭思肖は、宋が滅んだ後、頼るところがないとして土や根を画かなくなつた。人がその理由をたずねると、土地は番人（異民族すなわちモンゴル人）に奪い去られたため画かないのだという。さらに墨蘭を与えたくないと思えば、權威のあるものが迫つたとしてもやらなかつたという。

このように鄭思肖の墨蘭について言説をたどっていくと、解釈に悩むのが大美本の款記「丙午正月十五日作此壹卷」部分である。「正」「十五」の三字は手書、その外は墨摺による。自然に考えれば墨摺は量産のためであつたとも言えようが、みだりに画蘭を人に与えなかつた<sup>18</sup>という鄭思肖に、その必要があつたのであろうか。目的は判然としないが、明末にはこのような作例がほかにもあつたようである。陳繼儒（一五五八～一六三二）によれば、鄭思肖の蘭図に「丙戌正月十五日寫此一卷」とあり、その十一字のうち「丙戌」と「十五」の四字が手書でほかは墨摺であつたという<sup>19</sup>。大美本の丙午は元の大徳十年（一三〇六）、陳繼儒本の丙戌は至元二十三年（一二八六）のことになるが、長年にわたつてこの形式を貫く理由は何であつたのだろうか。

### 3、鄭思肖の平生と丙午年

さて、ここまでよく知られた内容ではあるが、あらためて過去の言説を振りかえり、大美本墨蘭図を問う地平を確認してきた。最後に、鄭思肖の平生を追いながら、大美本が画かれた丙午年についてみておこう。なお、鄭思肖の年譜はおもに陳福康校点『鄭思肖集』（上海古籍出版社、一九九一年）を参考にした。

鄭思肖は南宋・理宗朝の淳祐元年（一二四一）に臨安（杭州）で生まれた。本貫は福建連江。原名は未詳で、宋が滅んだ後に改名した思肖（宋宗室の「趙」氏を「思」うの意）の名で知られている<sup>20</sup>。父の鄭起（一一九九～一二六二。字は叔起、号は菊山）は性理学を究め、江南各地の県学や書院で山長をつとめた。思肖は幼少より父に従つて各地に訪れ、学問を修めて宝祐二年（一二五四）、十四歳の時に太学上舎生となり、博学宏詞科に応じた。家学を継ぎ、父と同じように各地で教鞭をとつたという。

景定三年（一二六二）、この年二月に父の鄭起が六十四歳で亡くなつた。このとき思肖は二十二歳であつた。父の死をきっかけに家は次第に困窮し、母とともに居を転々と移した。生活も世相も不安定な日々にあつてひたすら詩作にふけつたという。臨安がモンゴル軍に占領された徳祐二年（一二七六）、三十六歳の時に母が逝去した。そして思肖が三十代を終えるころ、厓山において抗戦むなしく南宋が滅んだ。その後、居を移しながら蘇州を中心として活動した鄭思肖は、慨嘆に堪えない思いを詩作に込め、『心史』にまとめ、鉄函に封じ、四月初八佛生日に蘇州承天寺の井中に投じた。至元二十年（一二八三）、鄭思肖四十三歳のときである。至元二十三年（一

二八六)、丙戌のこの年は先述の陳継儒がいう「墨蘭図」が画かれた。元帝(フビライ)の詔に応じ、宋の宗室でありながら出仕した趙孟頫を嫌悪し、交流を絶った年でもある。

五十代の鄭思肖はあまり自立った活動が確認できない。大徳五年(一二三二〇)、六十一歳の時に父の詩四十首を選して『清雋集』を成し、自作の「二百二十図詩」および「錦銭余笑二十四首」を併せて上梓した。この頃になると三四十代にみせた激しい感情の動きは、やや影をひそめてきた印象である。六十代を迎えた思肖は、世俗を避けて禅に遊び、各地の名山や寺観をめぐった。大美本墨蘭図が画かれた大徳十年(一二三〇六)、鄭思肖は六十六歳になっていた。南宋が都を奪われ事実上滅んでより三十年が経過し、晩年を迎えた胸中は、いかに本図に投影されたのであろうか。

## おわりに

延祐五年(一二二八)、七十八歳で鄭思肖は亡くなった。先の盧熊の伝によれば、病床で友人の唐東嶼に、自分の位牌には「大宋不忠不孝鄭思肖」と書くよう求めたという<sup>(2)</sup>。宋に殉ずることもできず、妻を娶らず後継を残さないまま臨終を迎えた鄭思肖。亡国に直面した遺民としての思いは『心史』に収められた詩文の端々にみえ、激烈な怒りや悲憤、憂いや煩悶、そして孤独が吐露されていた。

小稿では大美本墨蘭図をめぐって、伝来・作品・作者の基本的な情報を整理して概観してきた。しかしながら十分であるかといえれば甚だ心もとない。ただ、わずかであっても本作について理解を広げる手がかりとなれば幸いである。一見、簡潔で瀟洒にみえる大美本

墨蘭図。波乱に満ちた生涯の中で無根となった蘭は、枯れ果ててしまったのか、あるいは自由であったのか。この蘭の画は鄭思肖の孤独な自画像なのであろう。

(大阪市立美術館学芸員)

## 凡例

本稿においては古籍からの引用文ではできるかぎり正字を使い、そのほかの漢字は現代表記とした。なお、引用元が簡体字である註10・11は現代表記に改めた。引用文中の句読点、傍線は著者による。

## 註

(1) 本書は関西中国書画コレクション研究会に参加する九館(和泉市久保惣記念美術館、大阪市立美術館、観峰館、京都国立博物館、黒川古文化研究所、泉屋博古館、澄懷堂美術館、藤井済生会有鄰館、大和文華館)の所蔵する中国書画のうち、『中国書画探訪』(二玄社、二〇一一年)掲載の作品を中心に月例会で会読した成果をまとめた研究報告書であり、第一冊(二〇一三年三月)、第二冊(二〇一五年三月)につづく第三冊目である。

(2) 王育の以下に烈哲(詳伝不明)、餘澤(一二七七?)、魏俊民(生卒年不詳)、陳昱(?~一三三六?)、鄭元祐(一二九二~一三六四)、釋徳欽(詳伝不明)、王冕(一二八七~一三五九)、胡熙(詳伝不明)、段天祐(生卒年不詳)、韓奕(一三三四頃~一四〇六)、祝允明(一四六〇~一五二六)と続く。

(3) 祝允明の詩に「中表甥陳鼈子魚久抱微疾懷之得句因寄」(『懷星堂集』巻七)がある。正徳三年(一五〇八)の進士である何鰲(一四八四~一五三三)も字を子魚というが、祝允明との関係を考え、ここでは陳鼈を指すと考える。

(4) 以下、翁方綱跋の全文。割注は【 】で示した。「鄭所南墨蘭圖卷、紙本、蘭二叢、生氣迴出、奇作也。自題丙午正月十五作、下押所南翁三字紅文方印。按、所南宋遺老、入元不仕、客吳下、寄食城南報國寺以終。自稱景定詩人、有感淳集、中興集。宋遺民錄稱其畫蘭自更祚後不畫土根者是也。此卷自題丙午、不著年號。所南生卒歲月無所考、然陸行直跋所南墨竹云、予自童稚至壯時、得承顏接辭、而先生去世幾二十載。陸跋亦不著年世、而予考陸行直生於德祐元年乙亥、逮元成宗改元之丙午、陸年三十二歲、則其時所南尚在也。是此卷自題丙午、爲元成宗改元【此年號一字是家父諱】之十年丙午無疑矣。此卷內王冕題有晚年學佛、白首南冠語、又有吳人陳昱題詩云、家學相承寶祐年、東籬幾度菊花天、紫莖綠葉留殘墨、更覺秋光分外妍。予考鄭所南題井中心史云、德祐五年乙卯、三山菊山後人所南鄭思肖憶翁。蓋所南之父名起、號菊山。以陳昱詩證之、知其承過庭之訓、在宋末寶祐時、而其詩稱景定咸淳者、特自敘宋代遺民之詞、而其隱居吳下、則入元已久矣。即或一卷、而所南平生始末可以略得其概、豈僅作翰墨展玩已哉。」

(5) 劉驥業は字を伍源といい、原籍は福建。日本に留学経験があり、明治四十年（一九〇七）前後、二十二歳の時に早稲田大学政治経済科に在籍していたようである。高木理久夫・森美由紀・早稲田の清国留学生『早稲田大学中国留学生同窓録』の記録から（『早稲田大学図書館紀要』第 六二号、二〇一五年三月）参照。

(6) 博文堂を介した阿部房次郎の蒐集については、鶴田武良「原田悟朗氏聞書 大正一昭和初期における中国画コレクションの成立」（『中国明清名画展』図録、集巧社、一九九二年）が基本資料となる。後年の聞き書きではあるが、当事者による貴重な証言である。以下、当該箇所を引用すると、「鄭思肖の蘭。これは劉讓【ママ】業さんがもってきた。劉讓業という人は宣統帝の傳育係だった陳宝琛先生の甥なんです。陳先生は宣統帝をお育てしなければならんという責任があるでしょう。だから辛亥革命のあとは何にもご不自由がないようにということで、ずいぶん費用が出たんでしょね。それでご自分のものとか清朝のお蔵のものをずいぶん私どもに到されました。劉さんは若いから何度も日本に来ている間に

日本語も上手になった。ところが言葉ができるだけにお茶屋遊びを覚えて、その方に大きなお金を使うようになった。お金が足りなくなると私のところに来て、これを担保に置いてくからとか、この次にこれこれを持ってくるからとかいってお金を、かなりまとまった額でしたが、もってゆく。その通り品物は持ってくるんです。（後略）」とある。

(7) 高野絵莉香「黄山谷跋、李公麟筆「五馬図卷」について―北宋士大夫間における享受から清朝内府流出と日本流入まで」『史観』第一七二冊、早稲田大学史学会、二〇一四年九月。高野氏は李公麟筆「五馬図卷」（所在不明）の日本流入経緯を探る中で、同じく劉驥業を介して博文堂にもたらされた大美本墨蘭図に触れている。

(8) 「賞溥傑書畫目」として『故宮已佚書籍書畫目錄四種』（国立北平故宮博物院、一九三四年）に所収される。

(9) 楊仁愷『國寶沉浮錄・故宮散佚書畫見聞考略』（上海人民美術出版社、一九九一年）に「鄭思肖《蘭花圖》『石渠寶笈』初編著録、真跡、溥儀在天津時售出、日本阿部房次郎藏」（同書「佚目」書畫總目簡注）参照）とある。

(10) 溥儀『我的前半生』（全本、群衆出版社、二〇〇七年）に「在張園時代、内務府大臣們只剩下榮源一人、其余的或留京照料、或告老退休。我到天津后最初発出的「諭旨」有這兩道：「鄭孝胥・胡嗣瑗・楊鍾羲・温肅・景方昶・蕭丙炎・陳曾寿・万繩木式・劉驥業皆駐津備顧問。」「設総務処、著鄭孝胥・胡嗣瑗任事、庶務処著佟濟煦任事、收支処著景方昶任事、交涉処著劉驥業任事」（二〇一、二〇二頁）とある。

(11) 「張園里的經濟情況、和紫禁城比起来、自然差的多了、但是我還擁有一筆可觀的財產、我從宮里弄出來的一大批財物、一部分換了錢、存在外國銀行里生息、一部分變為房產、按月收租金」（註10前掲書、二〇二頁）。ただし、溥儀が把握していないところで持ち出されたものもあったようである。たとえば一九二八年に東京で開催された「唐宋元明名画展覧会」に際して、劉驥業は宣統帝所蔵と称する三点（黄筌筆「柳塘聚鳥図卷」、唐人「遊獵図卷」、李公麟筆「五馬図卷」）を出品したが、溥儀が正式に出品したのはこれとは別の馬和之画一点であった。この展覧会をめぐる

ては久世夏奈子「外務省記録に見る『唐宋元明名画展覧会』(一九二八)『日本研究』五〇、国際日本文化研究センター、二〇一四年九月)に詳しい。なお、劉驥業が出品した三点のうち、李公麟「五馬図巻」は、大美本墨蘭図と相前後して博文堂・原田悟朗のもとに持ち込まれたものと同時と思われる。註6前掲書参照。

(12) 『爽籟館欣賞』の刊行経緯や他の作品の蒐集については、弓野隆之「阿部コレクシヨンの形成とその特質」(『国際シンポジウム報告書 関西中国書画コレクシヨンの過去と未来』、関西中国書画コレクシヨン研究会、二〇一二年三月)参照。

(13) エール大学ギャラリー本は鄭元祐、韓奕、祝允明など一部大美本と同じ人物による跋が付随する。題跋を含んだ全図はホームページ上で公開されている(二〇一八年三月現在)。

<https://artgallery.yale.edu/collections/objects/50409>

また、フリーア・ギャラリーには大美本と同文の自題詩と款記および深い題詩をもつ墨蘭図が収蔵されているが、大美本よりも時代の下の印象である。フリーア本については鈴木敬『中国絵画史 中之一 元』(吉川弘文館、一九八八年)二二七、二二八頁を参照。

(14) 鄭思肖の詩は、没後しばらくは「金錢余笑二十四首」や「百二十図詩」などわずかに伝わるだけであったが、明末の崇禎十一年十一月八日、蘇州承天寺の君慧上人が浚井のときに井戸の底から「大宋鉄函経」と外署され、内題に「大宋孤臣鄭思肖百拜封」と書かれた一書を発見した。これが、およそ二五〇首の未公開の詩を含んだいわゆる『心史』であり、間もなく蘇州の張国維らによって刊行されたという(明・汪駿聲「書心史後」崇禎十三年四月二十七日)。「四庫総目提要」は明末の偽書として否定的に扱ったが、近代になって梁啓超(一八七三〜一九二九)らが重刊するなどして再評価し、偽造説を否定する論調が強くなった。とりわけ桑原隲蔵(一八七二〜一九三二)が宋末元初に活躍した蒲寿庚の事蹟を考証する中で『心史』の記述の高い信憑性を主張したことから、真作と考える潮流が大きくなったという。以上の議論は陳福康校点『鄭思肖集』(上海古籍出版社、一九九一年)を参照。

(15) 大美本の題跋について、詳細は前掲註1の「書画録Ⅲ」を参照いただきたい。

(16) 「題處梅家藏所南翁書。別本作、所南翁詩書之暇、爲屈平寫眞」(張炎「清平樂」『山中白雲詞』)とある。

(17) これはよく知られた話のようで、同様の内容は明・都穆(一四五八〜一五二五)の『寓意編』に「鄭所南墨蘭自題詩云、一圖之香、一國之瘍。懷彼懷王、於楚有光。所南宋太學生而不仕元、其畫蘭獨不畫土、人間其故答曰、土爲番人奪去。近朱堯民與余觀於夏侯橋沈氏。堯民云、是韓蒙庵故物」とあり、また明・文嘉『鈴山堂書畫記』(隆慶二年(一五六八)成書)「鄭所南蘭花圖」には「鄭本宋之遺民、其所作蘭不寫土、人有問之者答云、土被番人奪去了。此本乃吳中沈氏物」として載る。

(18) 先の盧熊による伝の外、陶宗儀『輟耕錄』(至正二十六年(一三六六)成書)卷二十に「工畫墨蘭、不妄與人、邑宰求之不得。聞先生有田三十畝、因脅以賦役取。先生怒曰、頭可碎、蘭不可畫」とある。また、大美本の落款に「求則不得、不求或與、老眼空闊、清風今古」(白文方印)とあるのもこれを示唆する。

(19) 「曾見鄭所南蘭一卷、畫左有丙戌正月十五日寫此一卷、共十一字。其月日寫此一卷皆墨刷印者、其丙戌十五四字、則手書填之」(陳繼儒『妮古錄』卷二)。

(20) 陶宗儀註18前掲書に「會天兵南、叩闕上疏、犯新禁、衆爭目之、由是遂變今名。曰肖曰南、義不忘趙、北面他姓也」とある。なお改名については、南宋の要所である襄陽・樊城にモンゴル軍が迫る中で上疏した文が、過激ゆえに受け入れられず、かえって反感を買ったため、世間から名を隠す必要に迫られたとする。

(21) 「疾亟時、囑其友唐東嶼曰、思肖死矣、煩爲書一位牌、當云、大宋不忠不孝鄭思肖。語訖而絶、年七十八」とある。